

横浜市立 さわの里小学校 学校評価報告書 (平成28～30年度)

重点取組分野	平成28年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①1時間毎の課題を明確にし、知識・技能の定着を図る学習活動を充実させ、学習の振り返りを行う授業を推進する。②重点研究主題を「認め合い、学び合い、表現する子」と設定し、国語科を中心に、共感や受容の満ちた環境の中で、自分の思いや考えを自分が選択した方法で表現する活動を充実させる。	①学習課題を明確にし、それに対する振り返りを行う活動を形式化することで見通しをもった学習がなされてきた。②単元や授業の中で、認め合う場面や学び合う場面を計画的に設定し、児童一人ひとりが自分の思いや考えを表現できる力が付くように授業を改善してきた。	C
豊かな心	①なかよし班活動などで「道徳の時間」において身に付けた道徳性を実践できるよう、互いの関わりを大切にしたい集団活動や体験的な活動の充実を図る。②「道徳の時間」の教科化が検討されていることを踏まえ、子どもが道徳の授業と実生活を関連付けて理解できるよう、指導方法や評価の在り方、教材の効果的な活用方法等について研修等で推進する。	①「道徳の時間」で育んだ道徳的心情や道徳的判断力、道徳的態度を、なかよし班活動の実際の場面で生かすことができるように、計画的になかよし班活動を実践した。②「特別の教科 道徳」の実践に向け、教職員の研修を行った。別業を充実させたり、年間指導計画の見直しを行った。	C
健やかな体	①年間を通して毎月長縄朝会を開催し、クラスで技や持久力を競い、互いに向上し合えるよう取り組んでいく。②運動の楽しさや喜びを味わえよう、教員の指導力の向上による授業の充実を図るとともに、主体的に運動するきっかけづくりのために職員研修を行い、授業に生かせるようにする。③職員の自己管理ができる児童育成の向け、実態に応じた食育の取組を推進する。	①年間通して長縄朝会を行い、クラスでの記録更新を目標に取り組んだ。②指導力向上のためにメンター研修等で体育の指導方法の研修を行った。③食育に取り組み、食の重要性や行事食の由来などを学習し、食の大切さについての学習がなされた。	B
特別支援教育	①毎月「児童理解」の時間を設け、学級で困り感をもつ児童について職員で周知する。児童への対応の仕方等でケース会議を行い、支援の手立てを講じていく。②週に1時間程度で学習に困り感のある児童の取り出し授業を行い、学習の補充をする。③個別支援学級の児童が一般学級の学習や行事等参加できるよう、保護者との連携を密に行う。	①「児童理解」の時間を積極的に設けたり、それ以外でも打ち合わせの時間に情報交換を密にできた。②可能な限り、取り出し授業を継続的に行うことで、当該児童の学習意欲や理解の向上につながっている。③意図的に連絡を取り合う中で、保護者との意思の連携が整い、学校行事にスムーズに参加することができている。	B
児童生徒指導	①職員間で「指導のスタンダード」を共有し、ぶれない指導をしていく。②「さわの里モラル」への意識を高め、毎月の生活目標と重ねたモラル指導を全校でしていく。③毎月の会議で、「児童理解」の時間を設け、児童の実態把握に努め、児童への指導の具体を検討し、全職員で指導に当たる。④毎日のあいさつ運動からコミュニケーションの機会を増やすことを大切にしている。	①児童指導場面においての複数指導に努めた。必要に応じてケース会議も行った。②道徳や月の生活目標のふりかえりなどを通して、「さわの里モラル」をベースにモラル指導を行った。③上の特別支援教育の①に同じ。④あいさつ運動を通して、児童があいさつする姿がより見られるようになった。	C
地域連携	①保護者の授業参観は基本的に毎日が公開とする。②地域清掃・地域防災訓練など学校が協力できることを考え、児童と職員が積極的に参加できるようにする。③10周年記念式典に向けて、学校と地域とが協力した式典を計画・実行していく。	①毎日の公開はもとより、土曜活用や出前授業等の公開を通して保護者・地域に開いた学校づくりがなされている。②行事に対する積極的な参加によって教員の地域参画の意識が高まった。③子どもたちの学習発表を行いながら、地域と学校が協力してよい10周年式典を行うことができた。	B
いじめに関する項目	①いじめを許さない、見過ごさない雰囲気づくりに努める。②児童一人ひとりの自己有用感を高め、自尊感情を育む教育活動を推進する。③「いじめはどの学校でも、どの児童にも起こりうるものである。」という基本認識に立ち、すべての教員が児童の様子を見守り日常的な観察を丁寧に行うことにより、児童の小さな変化を見逃さない鋭い感覚を身に付けておく。	①朝会や集会等で全校生に定期的に投げかけ、子ども達の意識・雰囲気を作りを行った。②道徳の授業の充実や個々を大切にしたい指導の徹底を年間を通して行った。③教員の研修を行い、そこでも具体例を挙げ、話し合いの中で協議していく中でスキルアップを図った。	B
人材育成・組織運営	①メンターチームを組織し、メンターのリーダーを中心として授業力の向上やお互いの課題についての共有を図る。②企画会・職員会議の資料を学年・ブロック・ブロックリーダー、教務、校長、副校長による企画会→職員会議と全体で提案事項を練っていく機会を設けることで情報の共有化を図る。	①メンターリーダーを中心として、先輩教員を講師として研修を行った。お互いの課題について話し合う機会を設けたりして教師力の向上を図った。②議題について話し合う場を多く設けることで、情報の共通理解を図るとともに、教員の理解度が高まった。	C
ブロック内相互評価後の気づき	・浜中学校との授業交流では、本年度は外国語活動を行い、英語科の小原教諭が本校にほぼ毎月交流に来られた。すべての学年で授業していただくことで、中学校と小学校の外国語活動の違いや共有できることとお互いに意識できた交流となった。 ・ブロック内で目指す子ども像を共有し、それに向けての指導を続けている。本ブロックは数年にわたって交流をしているが、年を経るごとに、慣例化し「目指す子ども像」が形骸化してきている懸念がある。子ども像について改めて確認する機会をもち、より計画的な指導に当たることができるといふと感ずる。		
学校関係者評価	・保護者アンケートの経年変化から、あまり向上が見られない。それぞれの活動や内容の具体的な手立てやアピールする方法を工夫していかなければならない。		

学校経営中期取組目標振り返り	・学年、ブロック研、企画会等、情報共有をしたり、連絡を伝え合ったりする場を多く設定することを通して、児童の課題や行事への準備への取り組みや共通理解が図られ、職員が一丸となった組織づくりの基盤ができつつある。 ・支援隊や校外委員を中心とした保護者の方の見守りにより、児童の安全については図られていた。また、学習においての見通しをもった学習計画の設定や授業展開を工夫していくことで、安心して学べる環境づくりができてきている。・授業公開については行っているが、保護者の参観が多いため言えない。
----------------	--

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①子どもの実態をつかみ、何が課題でどう具体的に改善していくかを明らかにする。②1時間毎の課題を明確にし、知識・技能の定着を図る学習活動を充実させ、学習の振り返りを行う授業を推進し、子どもにどんな力が身に付いたかを明らかにする。③重点研究主題「認め合い、学び合い、表現する子」とし、自分の思いや考えを自分が選択した方法で表現する活動を充実させる。	①確かな学力が身に付くためには、学習した内容がしっかりと定着していくことが大事だと分かる。そのために必要な学習展開や必要な学習内容を工夫していった。②課題の設定一まとめ一ふりかえりと学習の中で子ども自身力を意識できる展開を実践した。③「特別の教科 道徳」における、主題に迫る姿を研究を通して追求した。	B
豊かな心	①なかよし班活動などで一人ひとりの関わりを大切にしたい、互いの関わりを大切にしたい集団活動や体験的な活動の充実を図る。②「特別の教科道徳」として、一人ひとりの子どもが自分自身の問題としてとらえ、向き合う「考え、議論する道徳」へ転換を図る。そのために必要な指導方法や評価の在り方、教材の効果的な活用方法等について研究を行う。	①なかよし班活動を1年間継続することで、子ども同士のつながりが強まったり、リーダーの成長につながることができた。②「特別の教科 道徳」の学習の展開、子どもを中心とした学習の流れを考えるとできた。教材を通して理解した価値とそれに照らした自分の振り返りができるように	B
健やかな体	①子どもの実態をつかみ、何が課題でどう具体的に改善していくかを明らかにする。②運動の楽しさや喜びを味わえよう、教員の指導力の向上による授業の充実を図るとともに、主体的に運動するきっかけづくりのために職員研修を行い、授業に生かせるようにする。③食の自己管理ができる児童育成の向け、実態に応じた食育の取組を推進する。	①新体力テスト、学習状況調査等の結果から、児童の運動課題を捉え、多領域での指導を生かした。②学習前に、しっかりと学習計画を練ったり、合同体育学習を行ったりすることで、よりきめ細やかな指導になるように努めた。③日々の給食指導や食育の学習で、児童の食への正しい知識や健康を考えた正しい食生活への意欲態度を	B
特別支援教育	①毎月「児童理解」の時間を設け、学級で困り感をもつ児童について職員で周知する。児童への対応の仕方等でケース会議を行い、支援の手立てを講じていく。②週に1時間程度で学習に困り感のある児童の取り出し授業を行う。③個別支援学級の児童が一般学級の学習や行事等参加できるよう、交流の意義を明らかにして、保護者との連携を密に行う。	①「児童理解」の時間を設け、学級で困り感をもつ児童について職員で周知する。児童への対応の仕方等でケース会議を行い、支援の手立てを講じていく。②週に1時間程度で学習に困り感のある児童の取り出し授業を行う。③個別支援学級の児童が一般学級の学習や行事等参加できるよう、交流の意義を明らかにして、保護者との連携を密に行う。	B
児童生徒指導	①職員間で「指導のスタンダード」を共有し、ぶれない指導をしていく。②「さわの里モラル」への意識を高め、毎月の生活目標と重ねた指導をしていく。③毎月の会議で、「児童理解」の時間を設け、児童の実態把握に努め、指導の具体を検討し、全職員で指導に当たる。④毎日のあいさつ運動からコミュニケーションの機会を増やすことを大切にしている。	①スタンダードの具体として、望ましい話の聞き方・話し方を決めたり、学習用具の基本を定めたりした。②毎月の生活目標に向けて、各学級で具体的な目標を決め、月末には振り返りを行うようにした。③上の特別支援教育の①に同じ。④あいさつ運動を通して、児童が自分からあいさつする姿が見られるようになった。	A
地域連携	①「学力向上」や「健康」「安全」に向けて、家庭でできること保護者の授業参観は基本的に毎日が公開とする。②地域清掃・地域防災訓練など学校が協力できることを考え、児童と職員が積極的に参加できるようにする。③保護者の学校教育への関心を高めるため、具体的な内容で、発信していく。	①さわの里スタンダードや学習用具など、各家庭の保護者にも理解いただくように手紙等で発信した。②今年度の地域防災訓練では、昨年度とは異なり、5年生が防災について学習したことを発信し、地域の方々にも子ども達の学びの姿を見せられた。③行事ごとに保護者アンケートをとることでその後の学校運営に生かせることができた。	A
いじめに関する事項	①いじめを許さない、見過ごさない雰囲気づくりに努める。②児童一人ひとりの自己有用感を高め、自尊感情を育む教育活動を推進する。③「いじめはどの学校でも、どの児童にも起こりうるものである。」という基本認識に立ち、すべての教員が児童の様子を見守り日常的な観察を丁寧に行うことにより、児童の小さな変化を見逃さない鋭い感覚を身に付けておく。	①日常から各クラスを多くの目で見て、小さな情報でも専任等に集め未然防止に努めた。②情報共有を行い、配慮を要する児童等に多くの教員が声をかけるなどチームで児童を見ていく。③教員が高いアンテナをもてるように、毎月の職員会議で児童の観察のポイントを共通理解し、専任を中心に教員ともコミュニケーションを図っていた。	B
人材育成・組織運営	①メンターのリーダーを中心として、今何が課題かを具体的に話し合い、共有化し、解決に向けての具体案を出すことで、5年目以下の経験者による授業力の向上を図る。②企画会・職員会議の資料を学年・ブロック・ブロックリーダー、教務、校長、副校長による企画会→職員会議と全体で提案事項を練っていく機会を設けることで情報の共有化を図る。	①メンターリーダーを中心として、課題をお互いに出し合い、計画的に研修を行うことで、授業力、児童指導力、学級経営能力の向上が図られていた。②企画会、職員会議資料を多くの目で共有することで、議事の内容が周知され、円滑な学校組織運営につながるとともに、課題や問題点の改善ができた。	B
ブロック内相互評価後の気づき	・ブロックで小中授業交流会を行うことで、中学校での学習の様子分がかり、小中の学習のつながりの意識が高められた。効果的な情報交換ができ、ブロック内での目指す姿や各校の課題の共通理解が図られている。 ・H32にむけて、ブロック内でより連携を図り、「目指す子ども像」の共通理解や、重点的な指導項目の設定をしていく。		
学校関係者評価	・いじめへの取組について、児童支援専任を中心として、管理職、当該学級担任が連携をとれており、未然防止、早期発見、事案対応の面から取組がしっかりとされている。 ・学力向上に向けて、3学期制にすることで、より保護者の協力や意識の向上が図られ、期待できる。子ども自身が目的意識をもって学習に取り組むことができる工夫が必要となってくる。		

学校経営中期取組目標振り返り	・高学年を中心とした「なかよし班活動」の充実によって、異学年交流が図られ、子どもたちの「豊かな感性・思いやり」の高まりが感じられた。ただし、子どもたちの言葉遣いに課題が見られた部分があった。・道徳を重点的とした取り組みの結果、教師が「道徳的価値」を意識して、目の前の子どもを見、授業を展開することで子どもの道徳的態度を高められるようになりつつある。授業の技能については継続して高めていくように研修を重ねる。・学校運営における反省や振り返りを年度末だけでなく、夏にも行うことで、短期間で課題に気づき、対応することができた。
----------------	--

重点取組分野	平成30年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①子どもの実態をつかみ、何が課題でどう具体的に改善していくかを明らかにする。②1時間毎の課題を明確にし、知識・技能の定着を図る学習活動を充実させ、学習の振り返りを行う授業を推進し、子どもにどんな力が身に付いたかを明らかにする。③3学期制の特性を生かし、児童・教師・家庭がそれぞれに児童の課題をつかみ、学力向上の手立てを把握できるようにする。	①一単位時間の中で、児童がもつ課題を児童とともに設定したことで、意欲的に改題解決に取り組み姿が見られるようになった。②学びを習得する姿は、少しずつ見られるようになったが、活用したり探求したりする姿は、さらなる積み重ねと機会が必要だと感じる。③3学期制になったことで、評価が短期間化され、PDCAサイクルに具体	A
豊かな心	①なかよし班活動などで一人ひとりの関わりを大切にしたい、互いの関わりを大切にしたい集団活動や体験的な活動の充実を図る。②「特別の教科道徳」として、一人ひとりの子どもが自分自身の問題としてとらえ、向き合う「考え、議論する道徳」へ転換を図る。そのために必要な指導方法や評価の在り方、教材の効果的な活用方法、話し合いの仕方等について研究する。	①「オリエンテーリング」「運動会」「地域清掃」「6年生を送り会」などそれぞれの行事でのふれあいの中で「互いの思いやり」「高学年へ向けての意識」など多くの意識の変化が見られた。②本校の研究の中でも児童が道徳の授業に対して真剣に取り組む、活発に話し合う姿に変わってきている。	A
健やかな体	①子どもの実態をつかみ、何が課題でどう具体的に改善していくかを明らかにする。②運動の楽しさや喜びを味わえよう、教員の指導力の向上による授業の充実を図るとともに、主体的に運動するきっかけづくりのために職員研修を行い、授業に生かせるようにする。③日々の給食指導や食育の学習で、児童の食への正しい知識や健康を考えた正しい食生活への意欲態度を	①新体力テスト、学習状況調査等の結果から、児童の運動課題を捉え、多領域での指導を生かした。②学習前に、しっかりと学習計画を練ったり、合同体育学習を行ったりすることで、よりきめ細やかな指導になるように努めた。③日々の給食指導や食育の学習で、児童の食への正しい知識や健康を考えた正しい食生活への意欲態度を	A
特別支援教育	①毎月「児童理解」の時間を設け、学級で困り感をもつ児童について職員で周知する。児童への対応の仕方等でケース会議を行い、支援の手立てを講じていく。②週に1時間程度で学習に困り感のある児童の取り出し授業を行う。③個別支援学級の児童が一般学級の学習や行事等参加できるよう、交流の意義を明らかにして、保護者との連携を密に行う。	①本校の一人ひとりの御配慮する情報については全職員でみていくことを重点に置いて共有することができた。大きな事案になることがなかった。②取り出し授業で児童の学力や心理的安定のサポートをすることができた。③どのクラスについても活発に交流を行い、個別級児童の自信につながるサポート	A
児童生徒指導	①職員間で「指導のスタンダード」を共有し、ぶれない指導をしていく。②「さわの里モラル」への意識を高め、毎月の生活目標と重ねた指導をしていく。③毎月の会議で、「児童理解」の時間を設け、児童の実態把握に努め、指導の具体を検討し、全職員で指導に当たる。④毎日のあいさつ運動からコミュニケーションの機会を増やすことを大切にしている。	①日々の中で、職員同士の指導感や支援の視点を共有しながら、指導の均質化に努めることができた。②毎月の生活目標への具体的な学級での目標設定、ふりかえりの積み重ねることで集団の結束や規範意識、全員のモラル向上へつながった。③上の特別支援教育の①に同じ。④あいさつ運動の中で、歌を作ったり、多言語で親しんだり、	A
地域連携	①「学力向上」や「健康」「安全」に向けて、家庭でできること保護者の授業参観は基本的に毎日が公開とする。②地域清掃・地域防災訓練など学校が協力できることを考え、児童と職員が積極的に参加できるようにする。③保護者の学校教育への関心を高めるため、具体的な内容で、発信していく。④あいさつを地域に広げていくようにしている。	①授業参観や音楽集会、ハッピースタディなど児童の輝く姿を発信することで保護者・地域の方々の理解を得ることができた。②地域の方々とのつながりを児童自身が感じるいい体験を行えた。③④朝練や夏休み学習会など地域とのつながりを感じる地域に広がることができた。	A
いじめに関する事項	①いじめを許さない、見過ごさない雰囲気づくりに努める。②児童一人ひとりの自己有用感を高め、自尊感情を育む教育活動を推進する。③「いじめはどの学校でも、どの児童にも起こりうるものである。」という基本認識に立ち、すべての教員が児童の様子を見守り日常的な観察を丁寧に行うことにより、児童の小さな変化を見逃さない鋭い感覚を身に付けておく。	①各クラスの担任が児童の様子をよく観察し、情報を集めて対応していくことができた。②児童が色々なものに触れたり、人とつながったり、発表の場を経験したことで大きな自信につながる姿が見られた。③児童もおかしいと思うことは周りの大人に話すなど児童もおかしいといえる意識が出てきた。	A
人材育成・組織運営	①メンターのリーダーを中心として、今何が課題かを具体的に話し合い、共有化し、解決に向けての具体案を出すことで、5年目以下の経験者による授業力の向上を図る。②企画会・職員会議の資料を学年・ブロック・ブロックリーダー、教務、校長、副校長による企画会→職員会議と全体で提案事項を練っていく機会を設けることで情報の共有化を図る。	①メンターリーダーを中心として、今何が課題かを具体的に話し合い、共有化し、解決に向けての具体案を出すことで、5年目以下の経験者による授業力の向上を図る。②企画会・職員会議の資料を学年・ブロック・ブロックリーダー、教務、校長、副校長による企画会→職員会議と全体で提案事項を練っていく機会を設けることで情報の共有化を図る。	A
ブロック内相互評価後の気づき	・ブロックで授業交流を行い、子どもの姿から教職員交流ができたことが有意義である。「発達段階や社会環境の変化に応じた育成すべき力」を明確にしていることが、日々の授業づくりの有効な視点となっている。さらに、小学校から、重点研究を通しての気づきとして、自分からの発信力・表現力・他者とつながることに主体的に取り組む力など、実態に合わせた子どもの育成について提起し、交流が深まった。 ・本年度に向けて、さらなる連携と同じベクトルをもち、発達段階をふまえた教育の営みについて研修、実践、報告と検証を目指す。		
学校関係者評価	・新学習指導要領の主旨等をふまえ、子どもにつけたい力をより明確に示した新学校教育目標は「何を指すのか」、子ども・保護者・地域の人々に伝わる目標となっている。 ・よいものに触れ、よいと感じる感性を培い、ねばり強く考える力や、自分の言葉で積極的に発信・表現する力が育っていることが、子どもの姿から実感できる。 ・学校評価からは、児童生活が安定し、安心して学べる環境が整い、学校への期待度の高さが感じられる。家庭との連携を今後密にしていかなければならない。		

学校経営中期取組目標振り返り	・3学期制に変更し、ふりかえりや面談、評価などを検討した。行事の内容や時期も、3学期制の中でのあり方を共有してきた。・児童の「分かった」「できた」の授業の実現のために、算数少人数指導を2年生から6年生までを少人数指導職員を2名の体制に増やして行った。児童の実態に合わせて指導を行い、きめ細やかな指導を展開した。道徳を重点的取組2年目となり、より様々な内容項目について職員同士で研究する授業を展開した。授業の中で、児童が他の児童に応じる姿、意見をつなげる姿が表出できるよう、授業者の問い返しや広げる声かけなどの指導などを学んだ。「あいさつ」あ
----------------	--